The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国の若者の社会的スキルに関する社会心理学的研究：文化的要因を考慮した尺度開発と社会的スキル・トレーニングの試み
Author(s)	毛，新華
Citation	大阪大学，2008，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/49160
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【８】

氏　　名	毛（モウ）　新（シン）　華（カ）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　２１７０８　号
学位授与年月日	平成 20 年３月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科人間科学専攻
学　位　論　文　名	**中国の若者の社会的スキルに関する社会心理学的研究－文化的要因を考慮した尺度開発と社会的スキル・トレーニングの試み－**
論文審査委員	（主査） 教　授　大坊　郁夫 （副査） 教　授　桑野　園子　　教　授　釘原　直樹　　准教授　中谷　素之

論　文　内　容　の　要　旨

第１章　社会的スキル研究の理論的背景

本論文の目的は、スキルそのものにしか注目しなかった従来の社会的スキル研究に、「文化の影響力」の視点を導入し、中国の若者を対象に、文化の要因を考慮した社会的スキルの調査・トレーニングを行い、社会的スキル研究への理論的・実践的貢献を目指すことである。

従来の社会的スキルの研究では、社会的スキルを「行動」と見なしたり、「能力」と見なしたり、「生起過程」とするなど、さまざまなとらえ方があった。しかし、これらのとらえ方のいずれも、社会的スキルそのものの視点しかもたず、社会的スキルを取り囲む環境の規定要因の中で、最も影響力のある「文化」の視点が不十分であった。本論文で文化の影響力という視点を社会的スキル研究に導入することにより、社会的スキルの内容をより包括的に捉えることができると思われる。

それでは、一体、文化はどのように社会的スキルを規定しているだろうか。この問題を解決するには、先行研究で指摘されている社会的スキルの文化的共通性と特有性を手かがりに検討する必要があると考えられる。

さらに、社会的スキルには練習によって向上が可能という特徴がある。この特徴を生かしながら、社会的スキルの文化共通的、そして文化特有的な要素を考慮した社会的スキル・トレーニングを行い、スキルのより全般的な向上が可能と考えられる。

第２章　問題の所在と本論文の目的・構成

第２章では、本論文の全体像について述べた。

本論文では、６つの調査と２つの実験を行い、具体的に３つの目的を達成しようとした。

第１の目的は、社会的スキルを文化に共通の特徴と文化に特有の特徴から検討を行うことである。この目的を達成するために、２つのステップに分ける。ステップ１では、社会的スキルの文化的共通性の視点から、日本で開発された社会的スキルに関する尺度を中国に適用し、その可能性を探る。ステップ２では、社会的スキルの文化特有性の視点から、中国文化の特徴により、中国の若者の社会的スキルの構成要素を探るとともに、その個人差をはかる社会的スキル尺度を開発する。

第２の目的は、文化の視点により、中国文化に合致するトレーニングのプログラムを開発することである。その上で、第１の目的で検討した社会的スキルの尺度を活用しながら、トレーニングの効果を検討する。

第３の目的は一連の検討を通して、文化と社会的スキルの関係を明らかにするモデルの構築を試みることである。

第３章　既存の社会的スキル尺度の中国人への適用

第３章では、社会的スキルの文化的共通性の視点に基づき、社会的スキル尺度の通文化的適用を試みた。日本の若者に適しているとされる KiSS-18 を中国の高校生と大学生に適用したところ、得点の平均値は中国の若者が日本の若者をはるかに上回ったことや、中国の高校生と大学生との間の因子構造が違うなど、異なる点もあるが、尺度得点に性差がなく、年齢の上昇につれて得点があがるなど、日本の高校生と大学生の結果との一致が見られた。さらに、尺度の信頼性（内的整合性、再テスト安定性）が高く、ほかの社会的スキルとの相関関係に論理性を有し、妥当性も十分にあった。これらのことを総合的に判断した上で、KiSS-18 の中国の若者への適用の可能性が考えられる。

第４章　中国版社会的スキル尺度の開発

第４章では、社会的スキルの文化的特有性の視点に基づき、中国文化の特徴を反映する社会的スキル尺度の作成を試みた。自由記述調査を通して、中国人の人づきあいのスキルの様態を整理することができた。この整理をもとに作成した社会的スキルのリストを質問紙に構成し、中国人大学生と日本人大学生のそれぞれに対して、大規模なアンケート調査を行った。その結果、中国人大学生の社会的スキルの次元を「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」と同定し、中国人大学生社会的スキル尺度（ChUSSI）を開発した。一方、日本人大学生の社会的スキルの次元を「思いやり」、「つきあい」、「社交性」、「主張性」と同定した。「社交性」因子は中国と日本の両文化に共通しているものであることが確認できたと同時に、「相手の面子」、「友人への奉仕」、「功利主義」という因子は中国の「面子の文化」、「人脈の文化」などの文化的特徴を反映していることが確認された。すなわち、中国人大学生におけるこれらの対人関係の因子を構成する ChUSSI は文化間で共通する社会的スキルと中国文化の特有の社会的スキルを反映していると考えられる。さらに、異なる中国人大学生のサンプルでも、ChUSSI の因子構造、尺度の信頼性、再テストの信頼性などの尺度の有効性を検証することができ、尺度としての頑健さを確認することができた。

第５章　中国人大学生を対象とする社会的スキル・トレーニング（SST）

第５章では、引き続き、文化と社会的スキルの関係を社会的スキル・トレーニングを通して検討をした。ラボラトリー・メソッドによる体験学習（津村、2002、2003、2004）の方法に基づき、アメリカと日本では、多くの社会的スキル・トレーニングの実践が行われている。そこで、本研究では、従来のこの種の研究で考えられてこなかった文化的要因に取り組み、文化的要因も配慮した社会的スキル・トレーニングを行い、社会的スキルの全面的な向上を目指す。この目的を達成するために、本論文の第４章で明らかにした中国人大学生の社会的スキルの内容に基づき、中国文化を反映する社会的スキル・トレーニングのプログラムを考案した。これを先行研究で考案されている基本的なスキルをトレーニングするプログラムと合わせて、中国人大学生の社会的スキル・トレーニングのプログラムを編成した。その上で、中国人大学生を対象に、このプログラムを中長期（三週間）と短期集中（一週間）という２つのスケジュールで実践した。中長期のトレーニングの効果を検証するには、自己報告式の社会的スキル尺度を用いた。一方、短期集中の方は社会的スキル尺度のほかに、トレーニング参加者を対象とする会話実験を用いて、行動の面からもトレーニングの効果を検証した。その結果、トレーニングの期間の長さに関係なく、トレーニングの効果が認められた。その効果は中国文化を反映している尺度と文化共通的な尺度の両方に表れ、日本文化を反映する尺度においては、効果が示されなかった。すなわち、トレーニングの文化的弁別性があったといえよう。さらに、行動面におけるトレーニングの効果を検討したところ、トレーニング参加者自身の視点だけではなく、相互作用の相手、観察者の両方の視点からも参加者の社会的スキル・トレーニングの効果が認められた。また、中長期と短期集中のいずれのトレーニングには、３ケ月後のトレーニングの持続効果もあわせて確認することができた。

第６章　総括

社会生活を営んでいる限り、人々は他者とのつきあいから免れない。そのつきあいをいかに円滑するかは、すべての人の社会生活において最も重要な課題の一つと言っても過言ではない。人づきあいを円滑させるためには、決められているルールへの遵守が必要となる。しかし、そのルールはどの文化においても通用する部分が存在するとともに、ある文化にしか通用しないものも存在する。

本研究では、欧米・日本の先行研究を踏まえた上で、このような「文化」と人づきあいのルールとしての「社会的スキル」との関係を、中国人大学生のデータを手がかりにしながら、調査・実験を通して明らかにした。具体的には、より基礎的な社会的スキルは中国文化とほかの文化の間では隔たりがなく、どの文化においても共通である。これに対して、いわゆる「面子」や「人脈」などの社会的スキルは中国文化に強く影響され、中国に特有なものとなっている。また、社会的スキルのある特定の文化的要素を含んだ社会的スキル・トレーニングはその特定の文化的スキルを向上させることが可能である。これらの知見をまとめた上で、本論文では、「文化－社会的スキル-トレーニング・モデル」を提案した。

グローバル化がめまぐるしいほど進んだ現代社会においては、各国間の人的交流がますます盛んに行われるようになってきた。その中で、本研究で明らかとなった文化と社会的スキルの関係から引き出されたさまざまな知見は、各国国内の対人関係の質の向上に貢献するとともに、将来、各国間の交流の一助となることも期待される。

論文審査の結果の要旨

申請者は、中国人の若者の人づきあいにかかわる社会的スキルに焦点を当て、文化的共通性と特有性を手がかりに、通文化的な尺度の適用と中国文化の特徴を反映する文化特有性の尺度開発を行った上、中国文化を配慮した社会的スキル・トレーニングのプログラムを編成し、合わせてその実践を行って、文化と社会的スキルの関係を体系的に検討し、論の展開をしている。

本論文は、従来の社会的スキルの研究においてスキルを狭義に捉えていたことの不足を補い、社会的スキルを取り囲む環境の規定要因の中で、最も影響力のある「文化」の視点を社会的スキル研究に導入した。このことは本論文の特徴的な点である。

論文の第３章では、社会的スキルの文化的共通性の視点に基づき、社会的スキル尺度の通文化的適用を試みた。日本の若者に適しているとされる KiSS-18 を中国の高校生と大学生に適用したところ、尺度の信頼性、妥当性などの多くの指標により、KiSS-18 の中国の若者への適用が可能であるという結論が導かれた。

第４章では、社会的スキルの文化的特有性の視点に基づき、中国文化の特徴を反映する社会的スキル尺度の作成を試みた。自由記述調査でまとめた中国人の社会的スキルの特徴を描く項目リストをもとに、中国と日本の大学生を対象とする調査を行った。中国人大学生の社会的スキルを「相手の面子」、「社交性」、「友人への奉仕」、「功利主義」という４次元と同定し、中国人大学生社会的スキル尺度（ChUSSI）を開発した。一方、日本人大学生の社会的スキルを「思いやり」、「つきあい」、「社交性」、「主張性」という４次元で捉えられることを示した。「社交性」因子は中国と日本の両文化に共通しているものであることが確認でき、同時に、「相手の面子」、「友人への奉仕」、「功利主義」という因子は中国の「面子の文化」、「人脈の文化」などの文化的特徴を反映していることが確認された。すなわち、中国人大学生におけるこれらの対人関係の因子を構成する ChUSSI は文化間で共通する社会的スキルと中国文化の特有の社会的スキルを反映していると考えられる。さらに、異なる中国人大学生サンプルでも、ChUSSI の因子構造、尺度の信頼性、再テストの信頼性などの尺度の有効性を検証することができ、尺度としての頑健さを確認することができた。

第５章では、引き続き、文化と社会的スキルの関係を社会的スキル・トレーニングを通して検討をしている。従来の社会的スキル・トレーニングで考慮されなかった文化的要因を導入して、トレーニングのプログラムを編成し、中国人の若者の社会的スキルの全面的な向上を目指している。編成したプログラムを実施した結果、自己報告尺度だけではなく、トレーニング参加者の行動の面での検討においても、社会的スキル・トレーニングの効果が検証された。

また、トレーニングの文化的要因による効果も合わせて検証している。

上記をまとめると、以下の通りである。より基礎的な社会的スキルは中国文化と日本の文化の間では隔たりがなく、共通である。これに対して、いわゆる「面子」や「人脈」などの社会的スキルは中国文化に強く影響され、中国に特有なものとなっている。また、社会的スキルのある特定の文化的要素を含んだ社会的スキル・トレーニングはその特定の文化的スキルを向上させることが可能である。これらの知見をまとめた上で、申請者は、文化と社会的スキルの関係を総合的に捉える「文化－社会的スキル-トレーニング・モデル」を提案した。

本論文の貢献として、以下のことが考えられる。まず、中国の社会的スキル研究の理論的精緻化に貢献した。社会的スキルの文化的共通性と特有性により、文化的普遍性はもちろんのこと、中国文化の独自性による社会的スキルの特徴も明らかにすることができた。さらに、文化によって影響される社会的スキルの特性を社会的スキルの階層性に関する知見と接合し、文化－社会的スキルトレーニング・モデルを構築することにより、社会的スキルにおける中国の若者が文化の影響を受けやすい部分と受けにくい部分を明確に区別することができるようになった。また、実践的貢献として、従来の社会的スキル・トレーニングが実験群のみの設定であった点を改めて、実験群と統制群の比較を通して、社会的スキル・トレーニングのプログラムの効果を確認することがあげられる。また、トレーニングの効果の検証に第三者の視点を導入することで効果検証の精度を上げたことも社会的スキル・トレーニング研究としての大きな特徴となっている。

本論文の研究成果・考察は説得力のあるものであり、得られた成果および申請者の研究への取り組みから、今後更なる研究展開が十分に期待されるものと考えられる。

多様な研究の展開、理論的統合の調和のとれた本論文は、博士（人間科学）の学位授与に十分に値するものであると判定された。